好華堂野亭の戦記〈図会もの〉と通俗軍談

三宅宏幸

一、好華堂野亭と〈図会もの〉

曲亭馬琴著『異聞雑稿』（天保七年［一八三六］頃成立カ）「吉野屋為八」に、以下の記述が見える。[注1]

河太が名所図会の板を購得てしより、河太はさら也、この余の書肆も、その類の株ある者は、新刻の名所図会、京畿五ヶ国、東海道、木曾路二十四拝、巡礼旧跡紀州、并に[I]保元平治闘戦の名所図会といふものさへ出たるが、[II]文化の中葉より衰へて、今は名所図会とだにいふものなくなりぬ。天保に至りて、独江戸の書肆須原屋茂兵衛刊刻の江戸名所図会出たるのみ。

（傍線論者、以下同）

右の記事は、大坂の書肆河内屋太助の手代曹七から聞いた話を馬琴が書き留めたものであるが、傍線の二点に着目したい。

Ⅰ、「さへ」という表現から、「保元平治闘戦の名所図会」という書物を特異に見ていること。

Ⅱ、文化の中頃より「名所図会」が衰えたということ。

名所図会は「名所」とあることからわかるように、通常、地誌や名所案内の役割を果たす。しかし、傍線Ⅰにあるように、寛政から享和期（一七八九―一八〇三）にかけて、軍記を図会化した〈図会もの〉読本が刊行された。それが以下の三点である。

・『源平盛衰記図会』（大本、六巻六冊）
　秋里籬島著　西村中和・奥文鳴画　寛政六年刊
・『保元平治闘図会』（大本、一〇巻一〇冊）
　秋里籬島著　西村中和画　享和元年刊
・『前太平記図会』（大本、六巻六冊）
　秋里籬島著　西村中和画　享和三年自序

いずれも秋里籬島によって著されている点が興味深いが、このこと

は後に触れる。『保元平治闘図会』は、三宅宏幸「『椿説弓張月』典拠小考」[注2]が、馬琴著『椿説弓張月』（文化四―八年刊）との関連を報告しており、馬琴が印象に残っていた本書を『異聞雑稿』に記した可能性もあるが、ともあれ、軍記の「名所図会」は馬琴には珍しかったと思われる。次に傍線Ⅱについては、厳密にいえば文化年間（一八〇四―一八一七）にも、高市志友著『紀伊国名所図会』初・二編（文化九年刊）といった名所図会が出ている。ただし、馬琴と関わりのあった河内屋太助や吉野屋為八が「図会」から手を引いたことや、軍記を基にした〈図会もの〉読本が文化期に見えないことなどが、Ⅱの記述の要因になったとも考えられよう。なお、吉野屋為八については、藤川玲満「吉野屋為八の出版活動」[注3]に詳しいので参照されたい。

さて、そのような状況の中、文政期に入り、籬島の三作と同様の軍記や戦記に依拠した〈図会もの〉が出る。文政から天保期（一八一八―一八四三）にかけての該当作を以下に示したい。なお、為永春水によって編まれた『［増／補］外題鑑』（天保九年刊）「軍記の部」に籬島の〈図会もの〉三作が掲載されており、文政・天保期の〈図会もの〉もここに記載があるため、参考にした。[注4]

・『楠正行戦功図会』前・後編（大本、一一巻一一冊）
好華堂野亭著　西村中和画　文政四、七年刊

・『義経勲功図会』前・後編（大本、一〇巻一〇冊）
好華堂野亭著　西村中和画　文政八、九年刊

・『平家物語図会』前編（半紙本、六巻六冊）
高井蘭山著　葛飾北馬画　文政一二年刊

・『木曽義仲勲功図会』前・後編（大本、一〇巻一〇冊）
好華堂野亭著　葛飾北馬画　天保四、九年刊

・『太平記図会』初編（大本、首・七巻八冊）
堀原甫著　菱川清春・梅川重賢画　天保七年刊

・『三韓退治図会』（大本、五巻五冊）
山月庵主人著　葛飾戴斗画　天保一三年刊

文政・天保期の軍記・戦記を基にした〈図会もの〉読本は以上の六作である。ただし、理由は不明だが、『［増／補］外題鑑』に『平家物語図会』の記載はない。また『三韓退治図会』も、『［増／補］外題鑑』以降の刊行であるため記載がないことを付記しておく。ここでの問題は、文化期に「衰へ」た、それも軍記・戦記に基づく〈図会もの〉を、籬島に次いで著述したのが好華堂野亭であること、さらに六作中三作を担っている点からも、文政・天保期における〈図会もの〉の再興を野亭が担ったと認めうることである。

好華堂野亭は姓が山田氏、別名山田案山子とも呼ばれ、俗称は圭蔵。主に読本や浄瑠璃をものした。読本に『新編女水滸伝』（文政

二年刊）や『昔語茨の露』（文政三年刊）、浄瑠璃に『生写朝顔話』（天保三年初演）などがある。なお付け加えると、野亭は他に、

・『釈迦御一代図会』（大本、六巻六冊）
　好華堂野亭著　葛飾北斎画　天保一二年刊
・『大伴金道忠孝図会』前・後編（大本、一〇巻一〇冊）
　好華堂野亭著　柳斎重治・宝田南北画　嘉永二、三年刊
・『扶桑皇統記図会』前・後編（大本、一一巻一三冊）
　好華堂野亭著　柳斎重治画　嘉永二、三年序

などの一代記や歴史の〈図会もの〉を執筆している（ただし、後ろの二作は野亭の「遺筆」という位置づけ）。

本稿は、野亭が著した戦記〈図会もの〉の特徴について、その一端を明らかにすることを目的とする。

二、先行論と問題の所在

野亭が著した散文作品の特色に関しては、長友千代治「好華堂野亭」[注5]が、野亭と親交を結んだ平亭銀鶏著『銀鶏雑記』中の記述や野亭の作品を検証した上で次のように評している。

好華堂の著作活動というのは、筆工家として出版書肆の裏方を専門または本業にしていながら、作者に事故が起るとすぐに代作をつとめさせられる器用な人間であったと想像されよう。

野亭の初作は『新編女水滸伝』であるが、[注6]これも伊丹椿園著『女水滸伝』（天明三年［一七八三］刊）に拠りながら著述されており、一から創作を紡ぎ出すというよりも、先行作品を利用しながら物語を描く一面が認められる。その観点から見ると、先行書の図会化という手法で著述できる〈図会もの〉に、野亭の感心が向いたとしても不自然ではない。

一章で見たごとく、寛政・享和期に籬島が著したのは軍記を基にした〈図会もの〉であった。しかし、野亭は籬島とは少し異なり、武将を対象とした。物語でなく武将個人に焦点を当てたところに、野亭の〈図会もの〉の特徴がある。そして野亭が取り上げたのは、楠正行、源義経、木曽義仲といった不遇な英雄達であった。

不遇な武将の一代記を図会化する点は、横山邦治「終結期の読本―天保年間から幕末まで―」[注7]が述べるように、馬琴が著した源為朝の外伝『椿説弓張月』や、朝夷義秀の物語『朝夷巡島記全伝』（文化一二―文政一〇年刊）など、当時流行した「史伝もの」読本に通ずる「時宜に適した出板」であったと考えることができる。しかし一方で、前掲横山論考は野亭の〈図会もの〉について、「秋里籬島の提示した図会ものの規範をいくらか外れようとの微徴は見られる」ものの、「それを大きく踏み外すほどのものではなかった」と

している。江戸で流行した読本と比較すれば、野亭の〈図会もの〉は籬島の〈図会もの〉の「規範」から「大きく踏み外」さない、「敷き写し」程度の作品造りという評価なのであろう。

では、野亭の規範となった籬島の〈図会もの〉はいかがであろうか。籬島の〈図会もの〉についても、横山邦治「展回期の読本―天明末年から文化初年まで―」[注8]が、先行する書物の「完全な敷き写しといえる程度のもの」で、「ところどころ文章は異なっている点もあるが、極く一部分でいうに足りない」とする一方で、「読本と呼ぶにはあまりに創作性の欠除してい」る作品群ではあるが、上方出版界の江戸への対抗という「現象的価値」を有する点で読本史の中でも重要な地位を占めると評した。また、浅野三平「秋里籬島」[注9]は、籬島の「歴史図会もの」読本の功績として、「中・近世の軍記物を、一般庶民にも分り易く「絵入り」として、通俗化したところにある」と、当時の読者に受け入れられる工夫を評価している。近時、大高洋司「秋里籬島『源平盛衰記図会』―軍記物語「読本」化の一過程―」[注10]は、『源平盛衰記図会』を詳細に検証し、籬島が「陪臣も含めて義経顕彰の意図がある」こと、「盛衰記のもつ仏教的救済の主題を大幅にカットすることで「読本」化を図った」ことを明らかにした。さらに作中の挿絵に関して、浄瑠璃・歌舞伎の演出を想起させ、遊郭を描くといった「近世的な印象を与える」ものの、「その意識が本文に反映されることはない」と指摘している。その上で、以下のように結論づけた。

江戸を中心に人気を博した〈稗史もの〉読本は、工夫を重ねた構成の型の中に、演劇と中国小説（特に前者）を取り込むことで「創作」性を高めていく〈中略〉が、これと同じ土俵で本作を含む〈図会もの〉を論じることに違和感を覚える。『源平盛衰記図会』は、むしろそうした方向の「創作」性を抑制し、挿絵の一部にのみ限定することで、時代に即した入門書・娯楽読みものとなり得たのではなかろうか。

右の結論はあくまで挿絵への言及ではあるが、「「創作」性を抑制」し、「時代に即した入門書・娯楽読みもの」という面は、『源平盛衰記図会』全体にも当てはまる指摘と思われる。

大高論考の指摘で興味深いのは、籬島が「義経顕彰」の手法として通俗軍談に登場する中国の偉人を重ね合わせたという点である。というのも、野亭の〈図会もの〉にも所々に通俗軍談からの影響が垣間見え、詳しくは後述するが、単なる「顕彰」の意味合いだけではない用い方がなされている。

通俗軍談は中国講史小説を和訳したもので、元禄から享保期にかけて多くが出版された。具体的には、『通俗三国志』（湖南文山著、元禄五年［一六九二］刊）、『通俗漢楚軍談』（夢梅軒章峯著、元禄

八年刊）、『通俗列国志』（清地以立著、宝永二年［一七〇五］刊）、『通俗唐玄宗軍談』（中村昂然著、宝永二年刊）、『通俗十二朝軍談』（李下散人著、正徳二年［一七一二］刊）、などがある。通俗軍談が近世期の小説、つとに読本にどのように享受されたかについては、中村幸彦「通俗物雑談―近世翻訳小説について―」[注11]、徳田武「中国講史小説と通俗軍談―読本前史―」[注12]などが言及しており、特に徳田論考は読本と共通の性格を持つ通俗軍談を「読本前史」と位置づけている。また、他ジャンルの浮世草子や演劇などとの関連も検証がなされてきた[注13]。

一方で課題も残る。通俗軍談が浮世草子や演劇、読本に利用されるとして、ジャンルや作者によって方法は異なるのか、あるいは類似するのかといった研究はいまだ少ない。作者が異なればその方法にも差異があると思われるが、具体的にどのように異なるのかを考察することは、それぞれのジャンルや作者の特徴を明らかにする契機となろう。とすれば、通俗軍談の利用方法を検証することで、作品執筆方法の一端が明らかになるのではないか。

そこで以下、野亭の〈図会もの〉と通俗軍談との関連の実態について検証し、「歴史の図会化」という〈虚構〉が入り込まないはずの〈図会もの〉において、野亭が通俗軍談を用いてどのような工夫を行ったのかを考察していきたい。

三、故事としての通俗軍談利用

三―1、『義経勲功図会』

『義経勲功図会』は書名の通り、源義経の一代記である。本書の粉本として『義経興廃記』（小幡邦器作、元禄一七年［一七〇四］刊）の利用が指摘される[注14]。しかし他にも、古典の軍記物語に限らず、近世に成立した通俗史書や雑史に加え、能・狂言・浄瑠璃などの正史にこだわらない義経像が採用されている[注15]。近世期に流布した〈義経〉の様相が描かれているといえよう。そのような種々の義経伝承を採用した『義経勲功図会』であるが、本文中に通俗軍談を故事として利用する箇所が見える。

『義経勲功図会』前編巻之五、平家が一ノ谷の要害に立て籠もったため、正攻法では攻め込むことができない。義経は強兵三百騎を連れて、「漢土の渚函劔閣とも謂べき難路」の山道を行き、道案内を得て遂に一ノ谷の城郭が真下に見える場所に辿り着く。義経は人馬を勇め、自身は大夫黒に跨がって真っ先に巌を駆け下りる。義経に励まされた諸兵も崖を駆け下り（図1）、背後から急襲された平家は一ノ谷城から海に逃れる。この奇襲で源氏は勝利を得る。

義経の活躍譚として有名な「鵯越」であるが、『義経勲功図会』

【図1】『義経勲功図会』前編巻之五、21ウ・22オ（架蔵）

は工夫を凝らしていた。奇襲とはいえ、崖を見た兵は不安になる。そこで義経は作戦を決行する前に中国の故事を語り、兵達を安心させるのである。その故事は、以下のように語られる。[注16]

伝聞、魏の鄧艾蜀を攻んとせしに、蜀兵多勢にて剣閣に支しかば、其破がたきを量り暗に陰平道とて人跡絶たる間道を行事七百里。峻山絶谷の鳥も翔がたき切所を。鄧艾躬氈を以て吾身を裹みて転び下る。将士是を見て我も〳〵と木を攀葛を手操て蜀地に竊入遂に蜀兵を敗れり。（前編巻之五）

右の鄧艾が蜀を破る話は、『通俗三国志』巻之四十九「鄧艾越二嶺襲二成都一」にある。蜀の軍勢と戦う魏の鐘會と鄧艾は、蜀の要害である剣閣を破れずにいた。そこで、鄧艾は鐘會に次のような作戦を立てる。[注17]

一手ノ勢ヲ率シテ、陰平ノ小路ヲ廻リ、漢中ノ徳陽亭ニ出テ、却テ剣閣ヲ襲ヒ、関ヨリ西ノ方百里バカリニ奇兵ヲ用ヒテ、直チニ成都へ攻入バ、姜維必ズ剣閣ヲ棄テ来リ救ン。将軍ソノ時、虚ニ乗テ進ミ玉ハヾ、必ズ全ク功ヲ成ン。（巻之四十九）

しかし、鐘會は「陰平ノ路」が「嶺高ク岩ソビヘテ、鳥モ翔リ難キ処」なため、定法に則って正道を行く。鄧艾は鐘會が自身を侮ったことを怒り、息子の鄧忠に兵五千を与え、単独で「陰平ノ小路」に向かう。そして「顛崖峻谷、鳥モ翔リ難キ所」を七百里越えると、

「殊更高ク岨テ、一片ノ白雲腰ヲ縈リ、岩石屏風ノ如ク截立テ、人馬一足モ登ルコトヲ得」ない「摩天嶺」に到着する。鄧艾は軍兵に檄を飛ばす。

若コノ嶺ヲ越ル時ハ、麓ハ乃チ蜀ノ江油城ナリ。仮令死ストモ恨ナシ。元ヨリ大将ト士卒ノ情ハ兄弟ニ異ナルコト無。汝等志ヲ堕サズ、力ヲ尽シテコノ嶺ヲ越ナバ、必ズ希代ノ功ヲ成テ、富貴共ニ受テ恩沢子孫ニ及ブベシ。諸軍コレニ激サレテ、命ヲ棄ント勇ケレバ、鄧艾大ニ喜ビ、試ニ馬共ヲ追下ニ、大半悉ナク落著テ身ブルヒシテ立タリシカバ、扨ハ心安シトテ、自ラ毛氈ヲ以テ身ヲ包ミ、一番ニ転ビ落ケレバ、諸ノ大将モ続テ落ス。

（巻之四十九）

「摩天嶺」を越えた鄧艾の魏軍が蜀の江油城に攻め込んだため、急襲された城主は降参することになる。

両書を比較すると、場面描写や表現の一致も見える。『義経記』などの軍記には鄧艾の話は載っておらず、『義経勲功図会』が『通俗三国志』由来の故事を採ったことは間違いあるまい。興味深いのは、「鵯越」と「摩天嶺」とで物語中の趣向が似通っている点であろう。共に、獣さえ通らないような間道を通り、崖から急襲するという作戦である。「摩天嶺」の場面は『通俗三国志』の終盤に描かれるが、義経伝説の「鵯越」に『通俗三国志』「摩天嶺」を連想したとすれば、野亭が通俗軍談に詳しかった蓋然性は高い。

ただし、物語生成という観点から見ると、『義経勲功図会』が著名で人気のある義経を描くためか、先行する義経伝説から大きく離れた用い方ではなく、類似した通俗軍談の場面を故事として添える形での利用である。義経伝説にない〈虚構〉を描き出すまでには至っていない。その意味では、「図会ものの規範内」に入った使用法に近いといえよう。

三―2、『木曽義仲勲功図会』

次に、『義仲勲功図会』における通俗軍談故事の利用を見る。『義仲勲功図会』も、粉本が『木曾義仲記』（正徳二年［一七一二］刊）であるとの指摘があり、『源平盛衰記』などの既存の軍記に見られる筋から外れた描き方はされていない。ただし、義仲と巴御前との出会いについては、義仲が諸国遍歴中に巴の勇力に惚れ込んで盃を交わすという粉本には見えない展開になっている。そのため、「知勇兼備の若武者が孝心厚く勇力無双の美女と将来を約する場面の設定」は「稗史もの読誦中の感を抱かせる」と評価される。[注18]

この『義仲勲功図会』にも、通俗軍談を故事として利用する箇所がある。『義仲勲功図会』後編巻之一、義仲と頼朝の二人の確執が起こり、義仲が平家と手を組むという話を聞いた頼朝は義仲に対し

て、人質を差し出し臣従しなければ木曾に攻め込むと伝える。しかし、そもそもの二人の確執は、甲斐源氏である武田信光の讒言によるものであった。そこで、頼朝の家臣である土肥二郎実平は頼朝を諫める。その際の台詞を以下に示す。[注19]

「（木曾殿―論者補）義兵を上、強敵を瓦のごとく砕き、堅陣を蓆のごとく破り玉ふ身の、争か平家に因を結び、忽ちに令旨を反古にし同流の源氏を伐んとせられるべき。恐らくは平家より間諜の謀を用ひ、味方に同士軍させて其弊に乗ぜんためか、または信光行家等が讒言のなす処かと思はれ候。抑君東国に義兵を起し木曾殿北国に旌旗を上られしは、倶に帝王のため萬民の為に驕る平家を誅伐せん結構に候はずや。然るに其平家はいまだ亡滅ざるに、讒言反間を信じて同氏軍あらんは御賢慮の足ざるに似たり。古語にも両虎争ときは一虎は斃れ一虎は傷く。猟師其弊に乗じて労せず二虎を得と申せり。今木曾殿と当家と戈先を争ひ玉ふは二虎の争に似たり。而て平家は猟雄と成て手に唾して両家を亡さんとすべし。」

（後編巻之二）

ここに出てくる「二虎」の「古語」というのが、『通俗三国志』巻之六「呂布月夜奪徐州」に見える。国を追われた呂布は劉備が治める徐州に身を寄せる。曹操は劉備と呂布の二人が力を合わせることを恐れ、群臣に策を尋ねると、荀彧が以下の作戦を述べる。

「我一ツノ計アリ。二虎競レ食ノ計コトト号ス。」曹操ガ曰、「ネガハクハ聞ン。」荀彧ガ曰、「譬バ岩ノ下ニ食ニ飢タル二ツノ虎アリ。日夜往来シテ食ヲ求ム。時ニ山ノ上ヨリ食物ヲ投下時ハ、二ツノ虎コレヲ争テ、一匹ハ死シテ一匹は傷ヲ被ムラン。然ル時ハ容易ク二ツノ虎ヲ殺ス。今玄徳、徐州ヲ保ト申セドモ、陶謙ガ譲ヲ受タルバカリニテ、天子ヨリ封ジ玉ヘルニアラズ。勅使ヲ遣シテ之ヲ真太守ニ封ジ、又ヒソカニ書簡ヲ送テ、呂布ヲ殺セト云ツカハサバ、玄徳喜デ従ハン。玄徳モシ呂布ヲ殺サバ、将軍又玄徳ヲ討玉ハンニ、難キコト無ルベシ。玄徳モシ、呂布ヲ殺スコト能ハザル時ハ、呂布必ズ玄徳ヲ殺サン。此乃チ二虎競レ食ノ計ナリ。」

（巻之六）

荀彧は曹操に、劉備を徐州の太守とする代わりに呂布を殺すよう命じて二人を争わせる「二虎競レ食ノ計」を進言する。しかし結局、劉備が計略を見抜き、呂布を暗殺することはなかった。『義仲勲功図会』に『通俗三国志』の人物名が記されないことや、実平の諫言と荀彧の計略とで細かい差異もあるが、実力者の二人が第三者の謀によって不和となり、その不和に乗じて第三者が二人を征服するという「二虎競食」の内容は両書で共通する。

前節で見た『義経勲功図会』と同様に、義仲説話に則して通俗軍談の趣向が故事として挿入される。物語内の行動に中国故事をあげ

ることで、知略の正当性を確保するのである。ただし、故事として添える形のみであれば、前掲大高論考が指摘した籬島の手法と大差ないだろう。しかし次章で見るように、野亭の〈図会もの〉の通俗軍談利用は、また異なった様相を有している。

四、趣向としての通俗軍談利用

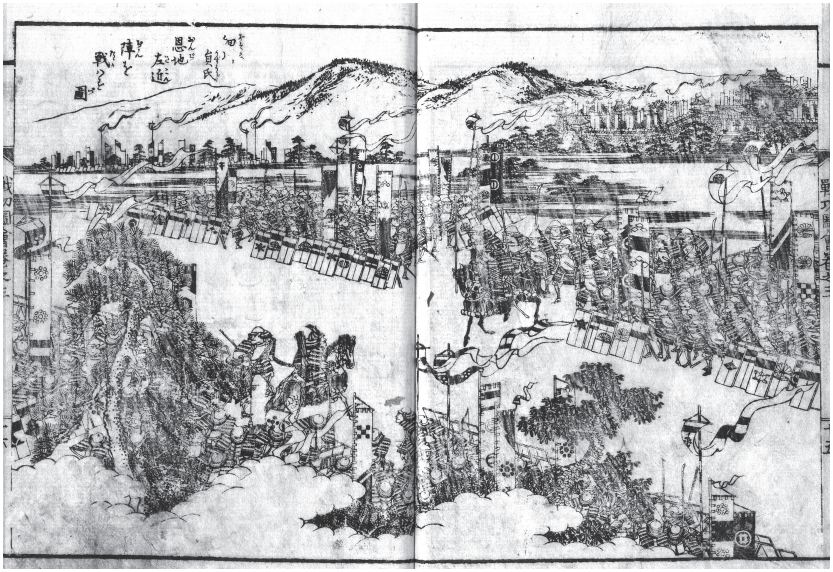
四―1、『楠正行戦功図会』

野亭の〈図会もの〉の初作『楠正行戦功図会』には西浦武孝の序が付いており、その序によると本書は、大楠公の楠正成に比して知名度の低い息子の小楠公正行の事蹟を記し、稗史や演劇などで民衆に親しまれたものとは違う、より「精確」な正行像を示すことを目指した、と書かれる。物語の大筋は近世軍書『楠二代軍記』(別名『楠氏二先生全書』、種田吉豊作、寛文二年［一六六二］刊）を粉本とし、[注20]他にも『南朝太平記』、『三楠実録』、『太平記秘鑑』などの複数の資料を利用している。[注21]そして、本稿で問題とする通俗軍談との関連も看取でき、一つの軍記をほぼ「敷き写」した籬島の〈図会もの〉とは異なった面が認められる。

まず故事としての利用は、「昔長阪坡の戦ひに、常山の趙雲が曹操が百万騎を斬崩しけるも、斯やと思ふばかり也」(前編巻之一)、「漢楚烏江の戦ひに、韓信が十面埋伏の計策に倣ひ、此度も十方に伏兵をもふけ」(前編巻之三)などがあげられる。[注22]『通俗三国志』の趙雲や、『通俗漢楚軍談』(夢梅軒章峯作、元禄八年刊）の韓信の名前を例に出し、人物の性格や行動に賦与している。さらに本書には、三章で見てきた故事としての利用だけでなく、本朝の史実を描くにあたっては〈虚構〉となる趣向が取り込まれている。

まず、『楠正行戦功図会』前編巻之三の場面を見る。楠氏があくまで南朝に従うため、北朝方の足利直義が軍勢を引き連れて攻め込んでくる。しかし、楠氏の軍師恩地左近の計略によって、足利は敗戦が続く。そこで足利の軍師細川員氏は一計を案じ、楠の軍師恩地と①「陣戦」を行うことを持ちかける（図2）。

（員氏―論者補）忽ち一陣を布終り、再び陣外に出、「②如何に恩地氏、某が布たる陣を、何と見玉ひしや。」と呼はりけり。恩地瞳を定めて熟然細川が陣を見るに、東西南北を分ち、五色五方の旗を立、尤変化の象有と見えたりける。恩地呵々と笑ひ、「名に轟し細川公なれば、嘸珍らしき陣を布玉はんと存ぜしに、是は小児も知たる八門金鎖の陣ならずや。」といふ。細川心怒り又問て謂、「足下何をもつて金鎖の陣なりと見るや。」恩地答て、「此陣には死門有生門あり。陰陣有陽陣あり。又向背あり。四面合して一陣ともなる。能八卦の陣に似たれども、



【図2】『楠正行戦功図会』前編巻之三、15ウ・16オ（架蔵）

又大いに異なり、号て③混元一気八門金鎖の陣といふ事、誰か知ざらん。」と嘲笑ふ。〈中略〉員氏「誠に楠家の謀師ほど有て、速なる答へ天晴に候。願くは御辺も一陣を布て見せ玉へ。」と望ける。左近「心得たり。」と陣中に帰り、下知を伝へて一陣を布終り、陣外に出て、「④如何に員氏、某が布たる一陣を知給へるか。」と問。（前編巻之三）

恩地と員氏は互いに陣を布き合い、その陣法がいかなるものかを当てる勝負を行う。この趣向は『通俗三国志』巻之四十二「孔明祁山布二八陣一」に見ることができる。

孔明ガ曰、「汝大将ヲ闘ハシメンカ、陣法ヲ闘ハシメンカ、又ハ兵ヲ闘シメンカ。」司馬懿ガ曰、「①マヅ陣法ヲ闘ハシメン。」孔明ガ曰、「汝マヅ一陣ヲ布。見物セン。」司馬懿乃チ中軍ニ入、黄ナル旗ヲ以テ兵ヲ分配シ、又馬ヲ出シテ、「②汝ワガ陣ヲ知タルカ。」ト問ケレバ、孔明笑テ曰、「我軍中ニハ、末々ノ大将モ其陣ヲ知、是乃チ③混元一気ノ陣ナリ。」司馬懿ガ曰、「汝モ一陣ヲ布。見物セン。」孔明乃チ中軍ニ入、羽扇ヲ持テ一度招キ、又車ヲ出シテ曰、「④汝ヨク我陣ヲ知レリヤ。」司馬懿ガ曰、「量ニ何ゾ知ザラン。是乃チ八卦ノ陣ナリ。」（巻之四十二）

両書の共通点は、①軍師同士で陣法を闘わせる、②員氏（司馬懿）が先ず陣法を披露する、③左近（孔明）は「混元一気」の陣法と答

える、④次に左近（孔明）が陣法を披露する、以上の四点が確認できる。ただし、『通俗三国志』では司馬懿が孔明の陣法を速やかに答えた後、実際の戦いへと移るが、『楠正行戦功図会』では、員氏がその陣を「臥竜先生が布たる、檀應の陣なり」と気付きながら、恩地を油断させようと考えて「無名の陣」と答えたため、兵達の前で恩地に辱められる話になっている。しかし、趣向が一致することや「臥龍」という孔明の通り名を本文にあげていることから、『通俗三国志』由来であることが認められよう。

次に、『楠正行戦功図会』前編巻之五、尊氏が賄賂を贈ったことで新田義貞の断りもないまま和平がなり、帝は花山の故宮に幽閉される。恩地は京都に上り、越智伊賀守を説いて帝を救う作戦を打ち明ける。その作戦では、敵を欺くために帝の影武者を用意する必要があった。身代わりの将を選出するため、恩地は宴会を催す。

斯て其翌日、恩地がはからひとして、獅子の間に①宴席をもふけ、②床の間には戦国七雄の時の楚王が故事を彫がきたる掛物をかけ、〈中略〉種々の佳肴を携へ出、席中せましとならべ立ぬ。〈中略〉時に神宮寺小太郎恩地に向ひ、「かゝる目出度御嘉儀に③御床の間の掛もの甚だ似つかはしからず覚へ候。如何なる謂の候や。」と問ければ、恩地答て、「されば彼の掛ものに附て子細あり。語て聞せ申さん。列位画面を熟と見給ふべし。あれ車に乗し一人の大将あり。車の下に身を隠す一人の王侯有。然して山の間より大勢追かくる図を画しは、漢土④戦国の七雄かたみに天下を争ふ時、秦楚大岳山の廣郊に戦ふ。されども秦は大軍の上兵彊ければ、楚遂に敗績し、三軍悉逃失て、残るは楚王の車と、車を押士卒十人許なり。此者等も秦兵の隆なるに懼て、王の車を林中に曳入、己がさま〳〵逃失ぬ。然るに一人の士卒残ゞまり、楚王に言けるは『君は早く御衣冠を脱て下官に賜へ。恐ながら大王の御身に代り、敵を欺き秦国へ赴候はん。大王は其間に落遁給へ。』と勧む。楚王甚はだ感じ給ひ、召れし御衣冠を士卒に与給ふ。士卒は逸疾く是を着し車の内に端座しければ、楚王は大樹の間に身を隠し給ふ。程なく秦兵追来り、林中に車の見ゆるを曳出し、其侭秦の陣中に曳行て『楚王を擒にせり。』と言す。秦王急ぎ引出し見るに、楚王にあらで一人の匹夫なりければ、大ひに怒り其子細を責問ふに、彼士卒少も偽らず一五一十を語りけるにぞ、秦王忽ち怒を和らげ、『汝匹夫ながら天晴忠義の者也。』とて、却て数多の賞金をあたへ本国へ助帰せしと也。」（前編巻之五）

ここでの特徴を抽出するに、①軍師が宴会を開く、②部屋には楚王が描かれた軸が掛けられている、③人々がその軸を掛けた意味を軍師に問い質す、④秦と楚の戦いの故事（身代わり譚）を説明する、

となる。そしてこの計略を行える者がいないかを尋ね、将達は帝の身代わりとなる役を進んで引き受けようとする。

この趣向は『通俗漢楚軍談』巻之十「紀信栄陽詐降レ楚」に基づく。項羽率いる楚の軍勢が栄陽城に籠もる漢軍を包囲する。漢軍は食糧が尽きてしまい、落城寸前に陥る。その時、張良が一つの計略を立てる。該当箇所は次のごとくである。[注23]

次ノ日大ニ①酒宴ヲ設ケ、使ヲ以テ諸大将ヲ招ケレバ、暫アリテ皆出来リ、各賓主ヲ分テ坐シタリシニ、②床ニ一軸ノ絵ヲ掛タリシカバ、立ヨリテ之ヲ見ニ、一輛ノ車ヲ画キテ、其跡ヨリ緊ク鎧タル武士、数十騎、急ニ彼車ヲ追蒐ル躰アリ。又傍ニ茂タル林アリテ、其陰ニ一人逃隠レタル躰ヲ写タル絵ナリ。③諸将ソノ意ヲ解ズ、乃チ張良ニ問テ申ケルハ、「是ハ何ヲ写タル絵ニテ候フゾ。願ハ其意ヲ聞ン。」張良申シケルハ、「④昔シ斉ノ景公、晋ト戦テ、散々ニ打マケ、諸軍勢ミナ四角八方ヘ逃失テ、後ヨリハ晋ノ大軍スキ間モナク追来リシカバ、景公イカントモスベキ様ナカリシニ、一人ノ田父、車ヲ御シタリケルガ、景公ニ告テ申ケルハ、『事スデニ急ナリ。大王早ク車ヨリ出テ林ノ中ヘ隠玉ヘ。臣恐ナガラ大王ノ御衣ヲ着シ、御車ノ内ニ坐シテ敵ヲ欺ン。』〈中略〉田父急ニ景公ヲ車ヨリ引出シテ、林ノ中ニ隠シ、自ラ其御衣ヲ着シテ、車ノ内ニ端坐セシニ、晋ノ兵二百余騎、四方ヨリ取園ミ、了ニ生捕テ帰リケレバ、晋公大ニ怒リ、『此ハ景公ニアラズ。速ニ殺セ。』ト下知セラルレバ、田父申ケルハ、『我景公ノ為ニ此ニ来ル。早々ニ死ヲ受ン。』〈中略〉晋公聞テ深ク感嘆シ、『其身ハ賤キ田父ナレドモ、其志貴ブベシ。〈中略〉』トテ、了ニ田父ガ命ヲ宥レタリ。此絵ハ乃チ之ヲ写セリ。」

（巻之十）

『通俗漢楚軍談』の特徴も、①軍師が宴会を開く、②部屋には楚王が描かれた軸が掛けられている、③人々がその軸を掛けた意味を軍師に問い質す、④秦と楚の戦いの故事を説明する、とまとめることができる。その後は、張良の計略を悟った諸将が「君難アラバ臣乃チ之ニ代ベシ」と、身代わりになることを自ら望み、その中から紀信が選ばれ、劉邦の影武者となった紀信は項羽に殺される。しかしこの行為によって、紀信は「忠臣」の称号を得る。

酒宴の場で、掛け軸を以て身代わりの必要性を訴える趣向が一致する。故事の内容が秦と楚との戦いに変更されるなどの違いもあるが、王の服を代わりに着て敵陣に連れて行かれる点、その忠に感銘した敵方が命を助ける共通点が認められる。また、本文中に「紀信は沛公に代て栄陽城に焼殺され」とあり、紀信の名が登場することも、通俗軍談の計略や人物像を重ね合わせた証左となろう。

右に通俗軍談との関連を二例あげたが、特に、恩地に対して孔明

や張良といった知略に長けた人物が重ねられている点が目立つ。今井正之助「「正成もの」刊本の生成―『楠氏二先生全書』から『絵本楠公記』まで―　付.『楠正行戦功図会』覚書」[注24]は『楠正行戦功図会』と粉本の諸書とを比較し、恩地の描写が「圧倒的に多い」ことをふまえて、「「楠正行戦功図会」を名乗りながら、実質的には恩地の物語となっている」と評したが、通俗軍談の利用もその要因の一つになっていよう。史実に則した故事ではなく、恩地の形象として明らかな〈虚構〉である通俗軍談の趣向が賦与されることを鑑みると、単純な「敷き写し」とはいえない一面が野亭の〈図会もの〉に見出せるのである。

四―2、『義仲勲功図会』

続いて、『義仲勲功図会』後編巻之四の場面を取り上げたい。義仲の叔父行家が播磨で平家に敗れ、後白河法皇は佞臣の讒言を信じて近隣の武士に義仲討伐の院宣を出す。そのため兵が法住寺殿に集まり義仲追討の準備をする。その話を聞いた義仲は法住寺殿を焼き討ち、法皇を幽閉する。有名な「法住寺合戦」である。以下の本文は「法住寺合戦」の後の展開にあたる。

茲に前関白松殿［割書］基房公」に一人の姫君御座す。天の主る美貌端麗なりしかば。天晴女御更衣にも具んものと。末頼母しく思はれけるが。木曽殿かねて彼姫君の美貌を聞。不見恋にあくがれ玉へども高位の御方の姫君なれば。言も出さで過し玉ひけるに。不意此度の援乱出来ければ。基房公深く憂玉ひ。かねては国王の后にもとおもひ玉ひし姫君なれども。木曽が恋慕ふこそ幸ひ。渠に与へて君を困め奉らざるやう計はめとて。〈中略〉姫君を密に御膝本に招き仰けるは。今般木曽義仲。一時の怒に乗じ君を押篭奉り。公卿の官職を止朝廷を乱るといへども。君にも御過ましまさぬにあらず。されば義仲此時に乗じ嵯峨に在す故高倉宮の御子を帝と仰ぎ法皇主上を永く困奉るまじきにあらず。然ありて天下の大乱王道の衰微たり。昔漢朝の末に董卓といふ者。漢帝を押篭困けるを。司徒王允が女貂蟬といふ婦。父に勧て自董卓が妾となり。種々諫て漢帝の閉戸を救ひたりしとかや。然れば御身貂蟬が忠孝に效ひ。木曽が妻となりて渠が心を宥め。君の御憂苦を救ひ奉り玉へ。

（後編巻之四）

まとめると、「美貌端麗」な松殿の娘が気になっていることを知っていた松殿が、法皇への暴挙を留めるために義仲に娘を差し出す、という内容である。そして義仲はその狙い通り、松殿の娘を寵愛して遊興に耽る（図3）。問題はその故事に、漢の時代に美しさを以て逆臣の暴走を止めた貂蟬の話をあげる点である。

【図 3】『義仲勲功図会』後編巻之四、13 ウ・14 オ（架蔵）

貂蝉の話は『通俗三国志』巻三「司徒王允説貂蝉」に見える。権力を握った董卓は帝を蔑ろにし、諸侯が董卓を倒そうにも一騎当千の呂布が目を光らせている。悩む王允は貂蝉に対して、董卓の妾となり、その後に呂布とも関係を持つことで、董卓と呂布の二人の仲を引き裂く計略「連環ノ計」を持ちかける。

貂蝉申ケルハ妾大人ノ恩ヲ受テ命ヲ棄ルトモ何ゾ惜ン。王允ガ曰、イマ百姓倒懸ノ苦ヲ受。君臣累卵ヨリモ危シ。朝廷文武ノ旧臣施ベキ計ナシ。只汝ニアラズンバ救コト能ハジ。其ノ故ハ董卓ガ手下ニ呂布ト云ル大将アリ。其ノ勇万夫モ当ルコト能ハズ。殊ニ義ヲ結ンデ董卓ト父子ノ約ヲナス。我コノ二人ヲ見ルニ、共ニ色ニ溺レ酒ニ耽ル。今連環ノ計ヲ用テ、先汝ヲ呂布ニ与テ後、又董卓ニ与ヘ、中ニテ汝ニ計ヲ行ハセテ、彼二人ガ間ヲ隔遠ケ、呂布ヲ欺テ董卓ヲ殺サセナバ、社稷再ビ興テ、漢ノ天下ミナ汝ガ力ナラン。（巻之三）

貂蝉は王允の作戦を引き受け、その後、見事に二人の仲を引き裂くことに成功する。『義仲勲功図会』の故事はこの『通俗三国志』の趣向に依拠すると考えて良い。[注25]

さて、右の『義仲勲功図会』の本文を見ると、通俗軍談をあくまで故事として用いているように見える。しかし着目すべきは、〝松殿が計略として娘を義仲に差し出す〟という点であろう。というの

も、義仲が松殿の娘を娶る記述は、従来の軍記においても少ない。例えば、『平家物語』巻第八「法住寺合戦」では「前関白松殿の姫君とり奉ッて、聽て松殿の聟におしなる」（覚一本）とあり、『源平盛衰記』に依拠した籬島の『源平盛衰記図会』巻之四「頼朝賜征夷将軍宣旨」も同様に、「女御皇后にもと思召ありける美人の由、伝聞て木曽推て御聟に成ける」など、義仲が「おし」て松殿の「聟」となったと記されるのみである。武久堅「征夷大将軍源義仲と入道前関白松殿基房」[注26]は松殿について、「入京した義仲に親身に接した貴族」であり、義仲に「懇切な教訓を垂れ、これが功を奏して、法皇の解放に導いた」人物として着目した。そして義仲と松殿の娘の記述を検証し、その挿話があるのが屋代本と覚一本であり、『愚管抄』や『玉葉』では「松殿ノ姫君」の婚姻に触れないことから、「物語の側のでっち上げ」である可能性を指摘している。論者が近世の『平家物語』注釈書類を確認したところ、例えば、松堂閑人四酔生編『平家物語考証』巻八に次の記述が見えた。[注27]

松殿の姫君とり奉て云々

補、義仲基房ノ女子ヲ姦スルコト、諸記并ニ東鑑等所見ナシ。系図ヲ考ルニ、基房ノ女子四人、長ハ参議高能ノ妻、次ハ後京極良経ノ室、季ハ従三位公明ノ妻ナリ。仲女ヲ西御方ト称ス。八條院ノ女房ナリ。若クハコノ女子ニ穢通セルモノカ。（巻八）

傍線部にあるように、義仲が「基房ノ女子」を「姦」したとされ、これを見ても、松殿から娘を義仲に差し出したというニュアンスは見受けられない。このことは、『義仲勲功図会』が従来の軍記と異なる性格を描き出したといえるのではないか。[注28]とすれば、『義仲勲功図会』の趣向は、野亭が論者未見の資料（近世軍書、注釈書類、演劇関係）に依拠したか、あるいは義仲伝説と『通俗三国志』とを重ね合わせた野亭の独自性であると推測できる。ともあれ、この箇所が通俗軍談と趣を同じくしていることは間違いない。野亭が意識して後者の手法を用いたとすれば、野亭の解釈や考証が『義仲勲功図会』の中に織り込まれていると考えることができる。

五、まとめと課題

以上見てきたように、野亭の〈図会もの〉には通俗軍談の利用が認められる。特に、『楠正行戦功図会』「細川員氏恩地左近陣を戦はす図」（図1）のように、通俗軍談から摂取した〈虚構〉を「図会化」している点は籬島とは一線を画し、また『義仲勲功図会』のように、義仲―董卓、松殿―王允、松殿の娘―貂蟬、と関係性を重ね合わせることで松殿の行動に中・近世の軍記には見られなかった要素を持

たせている点などを見ると、野亭の〈図会もの〉が軍記・戦記物語の単なる「敷き写し」ではないことが明らかになろう。

一方で、『義経勲功図会』や『義仲勲功図会』では利用の手法に違いがある。義経や義仲に関しては、史実から大きく異なる行動を行わせることはなく、あくまで古典の故事として通俗軍談を用いるように見受けられる。これは、義経や義仲という著名な人物であるがゆえに〈史実〉が人口に膾炙しており、明らかな〈虚構〉を混ぜることが叶わなかった可能性がある。例えば、『犬夷評判記』（文政元年刊）下之巻に、次のような記述がある。[注29]

八犬士にハ本伝なし．本伝なきものハ作しやすかるべし．朝夷にハ本伝あり．且当時の人物ハ．多く実録より出たり．実録詳なるときハ．作者の趣向に自由を得ず．これを綴りこなさん事．容易の業とハ思ハれず．（下之巻）

『犬夷評判記』は馬琴の知友殿村篠斎（三枝園）が『南総里見八犬伝』と『朝夷巡島記全伝』について批評し、馬琴がそれに答えたものを篠斎の弟である櫟亭琴魚が書き留めたという形を取る。しかし、本書の稿本が西尾市岩瀬文庫に蔵され、「全部を明らかに馬琴自筆の稿本と認め得る」ことから、「大部分を馬琴の創作と認めてよい」とされる。[注30]そしてその中に、取り上げる人物の「実録」が詳細であるほど、「作者」の「自由」は少なくなり、したがって、『巡島記』では『八犬伝』ほどに自由な記述が「容易」でないと書かれているのである。正行と義経・義仲においても、このような事情が働いたのではないか。すなわち、序に記された如く、知名度の低い正行に関しては〈虚構〉を挿入しやすいが、伝承が多く、人々に広く流布した義経や義仲に関しては、伝承と齟齬する〈虚構〉を入れにくいために、シンプルに「図会化」したという理解である。

一方で、出版事情の面から考察することも必要である。横山邦治「江戸読本の展開（文政年間）」[注31]が「出勤帳」三十三番の「河内屋源七今、楠二代軍物語之株ヲ以、楠正行戦功図会願出候処、甚願本麁抹ニ付右相改差出し候様申付、戻し候事」[注32]をはじめとする記述から、当初『楠正行戦功図会』を「持株を利用して忽卒の間に図会もの化して出板しようとした」ものの、「差構を含む種々の故障の続出で何度も書き直して、漸く出板できた」と指摘している。断定はできないが、あるいはこの「書き直し」が通俗軍談利用にあたるかもしれない。当局のチェックが厳しくなることによって文章の「増減」（「出勤帳」）が余儀なくされ、その際に既存の作品――本稿では特に通俗軍談――の趣向摂取が行われた可能性も無視できないのである。

本稿では、籬島の〈図会もの〉との相違を念頭に、軍記・戦記を基にした野亭の〈図会もの〉を検証してきた。最後に、課題として

『扶桑皇統記図会』の通俗軍談利用に触れたい。

『扶桑皇統記図会』前・後編は嘉永二、三年の刊行で、弘化三年に没した野亭の遺著にあたる。巻頭に松亭金水の嘉永二年序が付き、「幼稚より文の道を好み、唐に倭の書どもを、何くれとなく渉猟て、心に記憶し」た浪華の野亭が、思い立って著した書であると記される。[注33] 取り上げたいのは、『扶桑皇統記図会』後編巻之二、坂上田村麻呂の事蹟である。本文を比較したところ、粉本は『前々太平記』と考えて良い。[注34] しかし『扶桑皇統記図会』には、『前々太平記』にない趣向も看取できる。

『扶桑皇統記図会』後編巻之二、奥州で大熊丸という賊が蜂起したため、軍を差し向けるが敗北。新たに大伴弟麻呂を大将軍に、坂上田村麻呂を含む三人の副将軍が派遣される。戦いでは賊軍の悪路王が「幻術」を使い官軍を困らせるが、田村麻呂がそれを破る。

時に坂上田村丸は後陣に備て、先隊の合戦の体を見物して居られけるに、敵軍偽り敗て退を、味方是を誠に敗して逃ると心得て追行を見、是必ず敵の謀計に中るべしと思はれけるに果して敵の伏兵起り、加之ならず俄に雲霧の起りければ、田村丸馬の鞍を叩き、偖こそ賊将の中に幻術を行ふ者有と覚たり。昔蜀の孔明南蛮の孟獲を征伐し時、敵幻術を以て雲中より魔軍を降し蜀兵を悩せしとき、孔明其邪術なるを知、獣類の生血をとりて魔軍に洒ぎかけしかば、幻術破れて軍馬と見えしは藁木偶なりしとかや。今も其理にならひ、馬の血をとり器に入て、魔術を折く用意せよと下知せられければ〈中略〉用意の馬血を空中へ蒔散させけるに、案の如く悪路王の幻術破れ、風止霧霽て旧の白日と成ける　（後編巻之二）

「幻術」を破る方法として「馬血」をかけるのであるが、その故事として孔明が孟獲を捕らえる「南蛮征伐」の場面をあげる。しかしながら、この故事は厳密には誤りである。というのも、『通俗三国志』に「獣類の生血」で「幻術」を破る趣向はあるが、「南蛮征伐」ではなく序盤の「黄巾の乱」である。該当箇所を以下に示す。『通俗三国志』巻之一「安喜縣張飛鞭督郵」、

朱雋ガ曰、「コレ妖術ナリ。何ゾ怪ニ足ン。明日羊猪ノ血ヲ携ヘテ、兵ヲ山ノ頂ニ伏ヲキ、賊ノ勢ノ迫キタル時、一度ニ酒ギカケサセナバ、此法必ズ破ルベシ。」〈中略〉賊将張宝、又髪ヲサバキ文ヲ唱ケルニ、風雷天地ヲ震動シテ沙ヲ飛シ石ヲ走ラセ、黒雲ノ中ヨリ人馬潮ノ湧ガ如ニ討テ出〈中略〉五百ノ官軍ヒトシク出テ、カノ穢タル者ヲ洒ケレバ、忽チ空中ヨリ或ハ紙ニテ造レル人形、草ヲ束タル馬ナンド、紛々トシテ地ニ落、風雷自ラ息ニケル。　（巻之一）

「羊猪ノ血」をかけて「妖術」を破る趣向が描かれており、両書が

共通していると確認できる。ここでも、通俗軍談利用が認められるのである。ただし前述したように、故事の内容は誤りであり、「南蛮征伐」に獣の血をかけて幻術を破る趣向は見られない。このことから、野亭が通俗軍談を座右に置きながら〈図会もの〉を著述したというよりも、記憶の中から通俗軍談を用いたために誤ることもあったと考える方が自然ではなかろうか。

だが、野亭の遺著にあたる『扶桑皇統記図会』にまで通俗軍談が用いられたとすれば、このことは翻って、野亭の著作と通俗軍談との関連を看過すことはできない。従来、野亭の中国小説利用に関する具体的な検証はなされてこなかった。しかし本稿の検証によって、野亭の他の小説へも裾野が広がる。野亭の著述方法を考察する際には、中国小説をいかに利用しているのかといった問題意識も念頭に置く必要があろう。また、野亭の〈図会もの〉と同時期に刊行された蘭山著『平家物語図会』との比較も、著者の独自性や小説方法を考える上で重要である。今後の課題としたい。

注

（1）『続燕石十種』（中央公論社、昭55・7）に拠る。

（2）「同志社国文学」74（平23・3）。

（3）『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』（勉誠出版、平26・11）。

（4）横山邦治編『為永春水編［増／補］外題鑑』（和泉書院、昭60・11）に拠る。

（5）『［近世／上方］作家・書肆研究』（東京堂出版、平6・8）。

（6）『日本小説書目年表』によると、寛政一二年刊『絵本楠公記』初編が山田得翁斎の署名であるが、浜田啓介「画本読本の作者　速水春暁斎伝攷」（「国語国文」30―1、昭36・1）や横山邦治『読本の研究―江戸と上方と―』（風間書房、昭49・4）、注5長友論考において、野亭と同一人物であるかは疑義が呈されている。

（7）注6の横山書に同じ。

（8）注6の横山書に同じ。

（9）『近世中期小説の研究』（桜楓社、昭50・5）。

（10）「國學院雑誌」114―11（平25・11）。

（11）『中村幸彦著述集⑦』（中央公論社、昭59・3）。

（12）『日本近世小説と中国小説』（青裳堂書店、昭62・5）。

（13）長谷川強『浮世草子の研究―八文字屋本を中心とする―』（桜楓社、昭和44・3）、神谷勝広『近世文学と和製類書』、若草書房、平11・11）、三宅宏幸「宝暦期八文字屋本における通

俗軍談利用」（「国語国文」80―7、平23・7）など。

（14）注6横山書に同じ。また『日本古典文学大辞典⑥』（岩波書店）「義経勲功図会」（横山邦治執筆）の項。

（15）例えば、『義経勲功記』（馬場信意著、正徳二年［一七一二］序）や『鎌倉実記』（加藤謙斎著、享保二年［一七一七］刊）といった近世成立の伝説や故事も用いたと思しい。具体例を示すと、『義経勲功図会』前編巻之一で、「我復仇の志深く、奥へ下り候が、初て秀衡に対面せんに、童形にては奈何なり。」と、藤原秀衡に対面する際に「童形」であっては都合が悪いのではないかと義経が金売り吉次に相談するが、粉本と指摘された『義経興廃記』にそういった描写は見られない。しかし、先行論では関連があると見なされなかった『義経勲功記』巻之二に、「遮那王殿。橘次ニ向ヒ。吾童ノ躰ニテ奥ニ下リ。秀衡ニ対面センモ如何ナリ。」（黒田彰・岡田美穂編『義経知緒記／義経勲功記』〔クレス出版、平17・9〕に拠る）と「童ノ躰」での対面をためらう様が見て取れる。他にも、頼朝からの追っ手を逃れ奥州へ逃げようと安宅の関に通りかかったとき、弁慶が白紙の勧進帳を読み上げて場を切り抜ける著名な「勧進帳」の場面において、『義経勲功図会』後編巻之四は、「昔もさる例あり。楚の公子宋を落し時、其異れん事を畏れ微服して歩卒の荷を負。奴僕の躰にて関門を過んとせしに。門を守る兵是を難捕んとす。公子の僕策を上て公子を散々に擲。汝不力にて後るゝが故人の狐疑を生ぜり。」と「楚の公子」の故事を挿入する。これも『義経興廃記』に掲載されないが、例えば『鎌倉実記』巻之一六、「安宅の関」の直後の「如意の渡」の場面に、「鶴林玉露曰。楚公子微服過レ宋門。者難レ之。其僕操レ策而罵曰。隷也。不力也。門者出レ之。」（同志社大学図書館蔵本〔大本、一七巻一七冊〕に拠る）と看取できる。直接の典拠とは確定できないが、『義経勲功図会』は従来述べられてきた『義経興廃記』だけでなく、他の軍記や雑史を駆使したと考えられる。

（16）架蔵本（大本、一〇巻一〇冊）に拠る。適宜、旧漢字を新漢字に改め、句読点、濁点、鉤括弧を付した。以下の引用においても、同様の処置を施した。

（17）架蔵本（大本、五〇巻首一巻五一冊）に拠る。なお、架蔵本は巻之三のみ欠くため、巻之三は国文学研究資料館蔵本（請求記号：ナ四―七二〇―一～五一）に拠った。

（18）粉本の指摘および評価も、注6の横山書に同じ。

（19）架蔵本（大本、一〇巻一〇冊）に拠る。

（20）『日本古典文学大辞典②』（岩波書店）「楠正行戦功図会」（横山邦治執筆）の項。

(21) 今井正之助「「正成もの」刊本の生成―『楠氏二先生全書』から『絵本楠公記』まで―　付.『楠正行戦功図会』覚書」(『『太平記秘伝理尽鈔』研究』、汲古書院、平24・2)。
(22) 架蔵本(大本、一一巻一一冊)に拠る。
(23) 架蔵本(大本、一五巻合五冊)に拠る。
(24) 注21に同じ。
(25) 詳細は不明であるが、新潟大学人文学部の卒論要旨がインターネット上に公開されており、酒井遥「読本『義仲勲功図会』考」(平成26年度)が「『三国志演義』の「美女連環の計」を取り入れたりするなどの工夫が見られた」というように、同様の指摘をしているようである。ただし、同要旨では本稿第三章で触れた「二虎争食の計」には言及していないため、本稿と問題意識は異なると思われる。
http://www.niigata-u.info/hyena/jinbun/ja/sots/sot14/26haruka.html
(26)「日本文芸研究」59―3・4(平20・3)。
(27) 早稲田大学図書館蔵本(請求記号:リ〇五―〇〇八一四)に拠る。ただし、写本によっては当該記事が載っていない場合もある(管見の限り、筑波大学附属図書館蔵本、愛知県立大学附属図書館蔵本)。
(28) 鈴木彰「近世・近代の木曾義仲―『義仲勲功図会』から『木曾義仲勲功記』へ―」(鈴木彰・樋口州男・松井吉昭編『木曾義仲のすべて』、新人物往来社、平20・12)が『義仲勲功図会』中の義仲に関する記述を検証した上で、「『源平盛衰記』や『平家物語』とは異なる尺度で義仲の生涯を意味づけ、中世以来読み継がれてきた軍記物語とは一線を画した義仲評を提示した」と指摘する。
(29) 中野三敏編『江戸名物評判記集成』(岩波書店、昭62・6)に拠る。
(30) 注29における「解説」(中野三敏執筆)。
(31)『読本の世界―江戸と上方―』(世界思想社、昭60・7)。
(32)『大坂本屋仲間記録③』(大阪府立中之島図書館、昭52・3)に拠る。
(33) 国文学研究資料館蔵本(大本、一一巻一三冊、請求記号:ナ四―七一二―一～一三)に拠る。
(34) 以下に本文を比較する。『前々太平記』の本文は、矢代和夫校訂『前々太平記』(国書刊行会、昭63・8)に拠った。

『扶桑皇統記図会』後編巻之一

延暦三年五月上旬、摂州四天王寺の寺内に、五月七日の東の雲の頃、西南の叢より長四五寸許なる蝦蟇幾千ともしらず

這出で、段々に列り天王寺の境内に入りける。其蝦蟆の色黒く斑にて、中にも巨魁とおぼしきは色赤く、篆書の如き紋ありて肥大なり偖漸々に数多く出来りて幾万といふ数を知らず、

（後編巻之一）

『前々太平記』巻之七「天王寺蝦蟆妖怪之事」

同（延暦―論者補）三年（七八四）五月上旬摂州四天王寺に一つの奇怪出来せり。後其事を尋ぬるに五月七日の東雲の比、天王寺西南の藪沢の辺より、亘四五寸許の蝦蟇発り出て段段に列なり、荒陵の本を繞、羽蟻の続連せるが如く群がり、続て天王寺の境内に入りにける。其蝦蟆の色、多くは黒く斑にして、中にも巨魁と見えたるは色赤く奇しき古篆字形の如紋ありて、幾千万と数を知らず。

（巻之七）

【附記】

本稿はJSPS科研費、基盤研究(C)「文政期読本の基礎的研究」（24520216、代表：田中則雄〔島根大学〕）、若手研究（B）「近世後期読本における考証・批評と創作との連関に関する研究」（26770081）の助成を受けた成果の一部である。なお、本稿の一部に『文政期読本の基礎的研究』（研究成果報告書、平28・2）で論者が著した報告と重複する箇所がある。